

IAUD Newsletter vol.8 第9号(2016年1月号)

1.清水理事長より新年のご挨拶	1
2.IAUD アワード 2015 受賞紹介①	2
3.メディアの UDPJ 中部カラーUD 実施企業視察報告	7
4.手話用語 SWG 災害時のボディランゲージに関するワークショップ開催報告	12
5.標準化研究 WG 小学校 UD 体験ワークショップ実施報告	16
6.IAUD 2016 年 1 月の予定	21

世界のモデルとなるUD社会を目指して

清水隆明理事長より新年のご挨拶



明けましておめでとうございます。2015年6月、岡本一雄前理事長に代わり、新理事長に就任いたしました清水隆明と申します。

去年は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

総裁 瑶子女王殿下のもと、UDの普及と実現に向け、一層の精進をする所存でございますので、本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

ご高承のように、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、あらゆる人々が安全で暮らしやすい環境を整えることが求められている中、UDの必要性がますます高まっております。

2014年11月に開催した「第5回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2014 in 福島&東京」では、安倍晋三内閣総理大臣や舛添要一東京都知事からも、「2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、本会議の成果を共有しUDの実現に取り組む」との力強いメッセージを頂戴しました。

2015年は、この国際会議で導き出した方向性を軸とし、第4次中期計画を策定し、省庁や自治体、関係団体との連携を強化しながら活動をしてまいりました。

また、墨田区や地元企業と連携し、更に進化した「48時間デザインマラソン」の実施や、「UD検定・中級」の開始など、新たな取り組みも始めました。

2016年は、「東京2020オリンピック・パラリンピックへ向け、世界のモデルとなるUD社会を創る」を基本方針に、「第6回国際ユニヴァーサルデザイン会議 2016 in 名古屋(仮称)」を12月に開催致します。

UD製品・サービスにとどまらず、各業界の垣根を超えた社会システム・UD基盤構築に向け、さらには、日本発のUDを広く世界に発信していきたいと考えておりますので、皆様のご理解とご協力をよろしくお願い致します。

2016年1月

一般財団法人 国際ユニヴァーサルデザイン協議会 理事長
清水隆明



誰もが安全で安心な新たな UD による病院づくりを目指して

IAUD アワード 2015 受賞紹介①: 公共空間部門大賞受賞

「西葛西・井上眼科病院における人間の感覚に基づいた安全・安心の新たなユニバーサルデザインの取り組みと実践」

医療法人社団 済安堂／鹿島建設株式会社

IAUD アワード 2015 は国内外から 49 件のエントリーがあり、「大賞」3 件、「金賞」6 件、「銀賞」8 件のほか、UD において一定の基準を満たしたものに対して「IAUD アワード」29 件を選定しました。

IAUD アワード 2015 審査委員長のロジャー・コールマン氏（英国王立芸術大学院名誉教授）は、「今年は応募作品のレベルが向上し、UD が現場で広く理解され、普及が進んでいることを確信した」とし、さらに「総裁の瑤子女王殿下が最終審査にご臨席し、選考のプロセスと各作品に関する協議にも参加された。審査委員は、女王殿下の強いご関心と貢献を大いに歓迎し、今後のご支援と貴重な助言に期待している」と述べました。



コールマン
審査委員長

Newsletter では、今号より大賞と金賞を受賞した取り組みを順次、ご紹介します。

第 1 回目は、公共空間部門大賞を受賞した「西葛西・井上眼科病院における人間の感覚に基づいた安全・安心の新たなユニバーサルデザインの取り組みと実践」（医療法人社団 済安堂／鹿島建設株式会社）です。

コールマン審査委員長は、「同病院におけるスタッフと利用者の緊密な協力と UD の継続的な取り組み、そして病院をできる限り使いやすく、便利な場所にすると同時に、患者の安全確保と災害緩和に努める意欲に感銘を受けた」と高く評価しました。

この取り組みを、済安堂の井上賢治理事長に紹介していただきます。

ホスピタリティの実現をめざした UD の取り組み

医療法人社団済安堂井上眼科病院グループは、2016 年で設立 135 年を迎えます。

病院の基本理念である「患者さま第一主義」に則り、2006 年に外来中心の「お茶の水・井上眼科クリニック」を開設する際に、施設の利用者である患者さんにとって使いやすい病院作りをめざし UD の考え方を取り入れました。

さらに、眼科専門病院として患者の QOL/QOV (quality of life/quality of vision) の向上を支援する環境づくりを目指し、自らの病院での実践は基より、任意団体の「お茶の水 UD 研究会」を発足させ、UD の普及に積極的に取り組んできました。

今回 IAUD アワード 2015 大賞を頂きました「西葛西・井上眼科病院」の取り組みもその一環です。



西葛西・井上眼科病院

一人一人の感覚に配慮し、安全・安心に過ごせる眼科病院を実現

超高齢社会を迎える我が国では、目が見えづらく不便や困難を訴える「ロービジョン（低視力）者」の増加が必至であり、様々な施設整備において UD の取り組みが強く求められてきています。

井上眼科病院グループの一翼を担う「西葛西・井上眼科病院」は、患者増による狭隘化の解消、電子カルテの導入などの設備更新、分散している一部外来や事務所機能の集約化を図るため、2015 年に移転新築を行うこととなりました。

新築にあたり、「お茶の水・井上眼科クリニック」で継続的に行ってきた UD のスパイラルアップの実践に加え、3・11 の大震災以降の防災意識の高まりや、国際化の影響を鑑み、人間の感覚に基づいた利用者の誰もが安全で安心な新たな UD による病院づくりを目指しました。



患者さんと一緒に考え、人間の感覚に基づいて作る



安全性を向上させるために～誰にでも使いやすい工夫で危険や事故を回避

①体験や実経験を踏まえ、安全性を向上

利用者と病院スタッフ、設計者が一緒になり、実証実験を行うことで効果を確認し、実用につなげたり、災害の経験から備えや危険回避の工夫を創造しました。

- ・避難誘導用照明内蔵型手摺の開発と導入：日常は夜間足元照明として、火災時には安全に避難できる階段の方向を示す。
- ・災害時、緊急時への備え：帰宅困難者用の備蓄や避難ポート、マンホールトイレ設置など。



②直観的に正しい行動を想起させる工夫

目の見えづらい人にも認識できるよう「光」を用いたり、色のコントラストなどで直感的に正しく安全な方向に誘導できるような工夫を施しました。

- ・階段段鼻照明の導入：段差の認識、転落防止のため。
- ・ベッド下の足元灯の導入：ベッドサイドからトイレへの誘導手摺設置と建築計画。室内での転倒防止及び夜間の安全性確保のため。



安心して移動できるために～適切なサインや誘導で不安や迷いを取り除く

①一人一人の実感と統計データから使いやすさを向上

建替前に利用者の行動調査や聞き取りを行い、それに基づき安心な動線を検討しました。

- ・床デザインと照明による誘導システムやわかりやすいサイン：「お茶の水・井上眼科クリニック」のUDを検証し、スパイラルアップ。
- ・ワンウェイの建築計画：一般、小児、コンタクトレンズの3つの外来の患者動線の交差をできるだけ回避する動線、配置計画。



②様々な感覚にアプローチし、情報を伝える

人間の五感のなかでも聴覚、触覚、視覚に訴えるデザインや工夫をこらしました。

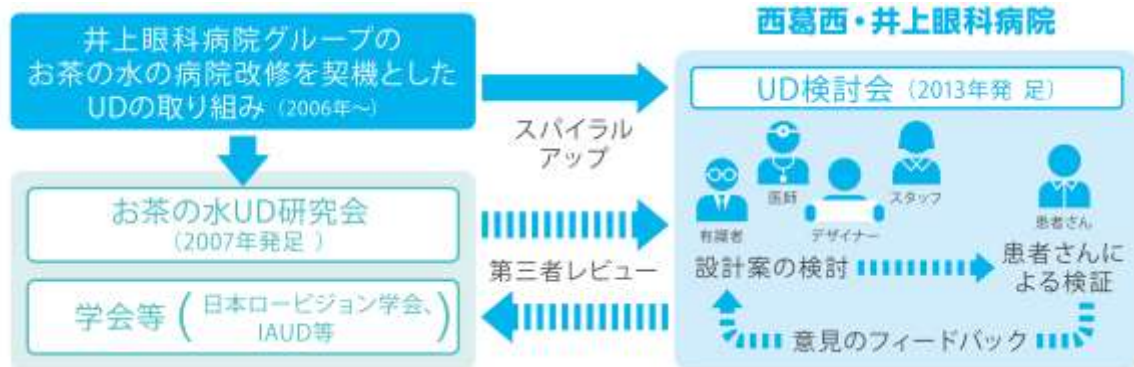
- ・音声を用いない音サインの開発と導入: 視覚情報だけでは病院玄関の位置やトイレの男女識別に不安がある利用者のために、事前情報と連動した音サインを導入しました。
- ・空間の音の響きに違い: 聴覚情報を頼りにする人のために吹き抜けや吸音率の異なる内装材を利用して、自分の居場所を確認できる工夫を施しました。



UD の継続的な発展～新病院づくりに向けたスパイラルアップと患者さんの参画

建替えに当たっては、スタッフ、有識者、設計者、ロービジョンの当事者などからなる UD 検討会を病院内に設置し、テーマ設定から、図面や仕様の確認、調査方法など UD の観点から様々な検討を行いました。

また、「お茶の水・井上眼科クリニック」の改修を契機に設立された「お茶の水 UD 研究会」や学会など第三者機関のレビューを行い、安全・安心な病院の実現を目指しました。



安全・安心の病院を実現

1・2階 外来

初めて来院した患者さんにもわかりやすい動線と誘導



ワンウェイ動線

動線と滞留の交錯を防ぎ、
分かりやすく快適に
移動できる計画

1 通路



2 エレベータ



3 診察待合



4 受付・会計



3・4階 手術・入院

入院患者さんの事故を防ぐ
誘導の工夫



1床室



4床室



西葛西・井上眼科病院 概要

所在地: 東京都江戸川区 西葛西3-12-14	4階 病棟
延床面積: 3,436㎡	3階 病棟、手術室、リハビリ室
階数: 地下1階・地上4階	2階 診察室、検査室、小児外来
竣工年月: 2015年1月	1階 受付・会計、検査室、 コンタクトレンズ外来
病床数: 32床	地下1階 医局、倉庫、会議室、等

竣工後もさらなる検証・改善を継続中

開院後には、今後のスパイラルアップを念頭に置いた患者、スタッフへのアンケート調査を行い、当院の取り組みの評価も行っています。

このように PDCA を回しながら UD に取り組み、今後も、さらなる検証・改善を継続していき、より良い病院づくりを実現させて行きたいと考えています。(了)

IAUD アワード 2015 受賞結果はこちらをご覧ください。

<http://www.iaud.net/dayori-f/archives/1511/09-000000.php>

IAUD アワード 2015 審査委員長からのメッセージ、審査講評はこちらをご覧ください。

<http://www.iaud.net/dayori-f/archives/1512/22-000001.php>

カラーUD の普及の必要性を再確認

活動報告:メディアの UDPJ 中部カラーUD 実施企業視察

メディアの UD プロジェクトは、企業における先進事例に学ぶため、2015 年 10 月 13 日(火)と 14 日(水)に中部地方でカラーUD に取り組んでいる企業である日立オムロンターミナルソリューションズ株式会社旭本社(愛知県尾張旭市)、アロン化成株式会社名古屋工場(愛知県東海市)、伊藤光学工業株式会社本社(愛知県蒲郡市)の 3 社を視察しました。

当日は同 PJ のメンバー 6 人が参加し、各企業が取り組んでいる様々なカラーUD の事例を学び、大変有意義な視察となりました。

今号の Newsletter では、当日の様子を同 PJ の宇津木 希副主査に報告していただきます。



日立オムロンターミナルソリューションズ(株)
旭本社前

カラーUD を取り入れた ATM を製造

初日の午前中は、ATM メーカーとして UD の手法を積極的に用いている日立オムロンターミナルソリューションズ(株)の旭本社を視察しました。

今回の目的であるショールームには、様々な ATM がラインナップされています。

入ってすぐ左には UD モデル機が設置してありました。より多くのお客さまが ATM などの自動機を安心してご利用いただくために、利用者の操作性に配慮した ATM 画面の設計を行ってきたとの説明がありました。

外観として最も特徴的だったのは、車イスを利用される方の使いやすさ向上を考え、低い位置からも見えやすいように操作画面を緩やかに傾斜させ、ATM により近づきやすいように足下のスペースを確保していたことです。

また、本体の外枠を伝うだけで媒体の入出口へ誘導するアーチ型ガイドフレームを採用しているほか、荷物置き台を設置できるようになっていたり、ハンドセットの利用価値を見直したりと、旧型機から多くの改善が行われていました。

カラーUD の取組みとしては、見やすい高輝度画面のガイダンスを用いたり、入出金口ランプや通帳、カードを照らすメディアスポットライトなどにわかりやすい色の LED を採用してお客さま



ショールームの UD モデル ATM を視察

の操作をやさしく誘導していました。

さらに操作画面は、色数が多くても色同士のコントラストを保ち混同しない配色を選定しているとのことでした。この取組み以後、設計者が意識的にカラーUD のチェックを行う流れができあがったそうです。

その他の展示機器に目を向けると、銀行のカウンターを模した展示もあり、印鑑検索システムや、テンキーで基本操作が完了する営業店窓口用端末を体験することもできました。

カウンターのスペースを考慮し、通常使わない文字入力用のキーボードはテーブルの中に収まっていたのは印象的でした。まさに舞台の裏側を覗かせてもらったようでした。



熱心に視察をするメンバー

さらに、海外の ATM も製造されており、中国、東南アジア、台湾の ATM を見ることができました。

中国では路上の壁の中に埋まったように ATM が設置されています。使い勝手より、セキュリティを重視したもので、無骨さも安心感となっているそうです。

詳しく見てみると、磁気カードのスキミングを防止するよう半透明のカード挿入口となっていたり、画面はタッチパネルではなく、画面両サイドにあるボタンを使用するようになっていました。

中でも最も驚いたのは、紙幣の保管部が金庫型となっていたことです。ダイヤルの施錠で、戦車用の鉄板を使用しているそうです。

東南アジアとなるとまた勝手が違っていました。かなり小型化されたもので、バーコードの読み取りが必須となる仕様になっていました。

また、台湾では銀行に入る前にセキュリティ対策がほどこされているため、ATM はいたってシンプルな構造となっているそうです。各国でレギュレーションが違う、文化が違うことを確認することができました。

ショールームの中央に展示されていた設備は、ATM などに投入された紙幣をチェックしながらカウントする装置でした。

この装置は「紙幣置流方式」で、内部の構造が見えるようにスケルトン化されていました。一秒に 10 枚のスピードで紙幣を確認し、破損や真偽をチェックし、チェックに通らなかった紙幣は弾く構造となっていました。

具体的な構造は企業機密とのことでしたが、ここに来なければ見ることはできないものであり、貴重な体験となりました。

徹底したユーザー目線で製品開発

続いて、1951 年に日本初の硬質塩化ビニル管の開発、製造に成功した企業で、創業以来の伝統である開発力を武器に、社会のニーズを先取りした製品を開発、提供しているプラスチックの総合加工メーカーであるアロン化成(株)の名古屋工場を視察しました。

見学に先立ち、まずは同社のビジョンや取り組みについて説明がありました。

同社は、「給排水」「介護・福祉」「高機能エラストマー」「環境・リサイクル」を重点指向分野に位置づけ、日々人々の豊かで住みよい暮らしを実現するため、先進の技



アロン化成(株)の開発拠点である「ものづくりセンター」展示エリア

術力と開発力で「人と地球にやさしい」製品づくりに取り組んでいます。

続いて、同社の「提案型メーカーとして、ものづくり力を強化し、事業の変革を生み出す場を目指す」という企業コンセプトを実現化する開発拠点である、「ものづくりセンター」を見学しました。

センター自体が色覚の多様性に配慮した施設となっており、2012 年度に「カラー・ユニバーサルデザイン認証」を受けています。

展示エリアは「安心・安全」を目指しており、見学者が目にする製品情報の分かりやすさへの配慮や、来場する見学者とのコミュニケーションの場として相応しい空間となるよう、カラーUD に取り組まれたそうです。

建築物としても UD を考慮した設計になっており、手すりやスロープの配備など様々な配慮が見られました。

また、センター内に掲示されている開発の歴史を紹介する「開発のあゆみ」展示も、色のみに依存しないデザインが採用されていました。

その他の展示エリアの説明パネルも、すべてカラーUD 対応しているとのことでした。



カラーUD 対応したパネル



展示の説明を受けるメンバー

製品展示としては、介護用品や給排水設備などをご紹介いただきました。例えば、介護用トイレは一般の家庭や介護施設の部屋に置いた際に、使う人が気兼ねなく使えるよう、音やにおいを消す機能を備えています。使う人に思いやりを持って製品を開発されている姿勢が感じとれました。

また、センター内にある製品を体験できる二階建て家屋「体験ハウス」では、二階で水を流しても流水音が響かない様工夫された配管や、小回りが利いて座りやすい歩行補助カーなどを体験しました。

いずれの製品も、使う人にフォーカスを当て、利用者が何を求めているかに徹底的にこだわって開発されていました。

また、カラーUD の製品としては、分別ペールが展示されていました。バリエーション(色弱模擬フィルタ)をかけて見ても、きちんと各色が識別できる配色が採用されており、色弱の方の日常生活の中での不便の解決することができる上に、一般色覚の人にとっても色分けされているので分別しやすいという、UD のよい事例であると感じられました。

見学後、そもそもどのような経緯でカラーUD の取り組みに着手されたかをお伺いしたところ、高齢者の介護用品を開発する過程で、高齢者がどのような見え方をするのか視覚研究を行っていた際に、色弱者の存在とカラーUD について知り、高齢者も色弱者も、どんな人にもわかりやすい配色やデザインが必要であると気づき、取り組みを始めたとのことでした。

生活に密接にかかわる様々な製品を、ユーザーの目線に立って開発に取り組む姿勢は大変勉強になりました。



カラーUD 対応の分別ペール

カラーUD 支援ツールの色弱模擬フィルタを開発

2 日目は、昭和 31 年に創業以来、光学製品のメーカーとして日々開発を行い、眼鏡レンズのコーティングやコンタクトレンズ製造を初めて国内で実用化した伊藤光学工業(株)の本社を視察しました。

同社は、プラスチック眼鏡レンズの表面硬度向上(ハードコート)、反射防止(ハードマルチ)、耐衝撃性向上(プライマコート)、撥水加工、汚れ防止、紫外線カット、赤外線減光処理など世界最先端のコーティング技術の開発によって、常に業界をリードしています。

今回視察したのは、中核をなす眼鏡レンズ部です。眼鏡レンズ部は、コーティングという技術を通してレンズにさまざまな機能を与えています。



伊藤光学工業(株)本社ビル



色弱模擬フィルタ「バリエントール」

このコーティング技術から生まれたのが、メディア UDPJ のカラーUD 活動で大変役立っている色弱模擬フィルタ「バリエントール」です。

「バリエントール」は、創業 50 年の平成 17 年に豊橋技術科学大学、高知工科大学とともに研究開発に着手しました。当時は、色覚研究者のあいだで「色弱模擬を光学フィルタで実現するのは理論的に不可能」と言われている中、経済産業省の産学官連携プロジェクトで、約 2 年の研究開発期間を経て完成し、平成 19 年春には色弱模擬フィルタ「バリエントール」

として世へ送り出すことができたそうです。

「バリエントール(Variantor)」の名には、色彩(vari、フィンランド語)豊かな社会の中で、多様性(variety、英語)ある色覚の人々が、安心して暮らせる社会を作るため、カラーUD の門(tor、ドイツ語)を開きたい。そして、「バリアを取る(日本語)、バリエントール」、そんな願いが込められているそうです。

「バリエントール」は、一般色覚者が使用するカラーUD 支援ツールで、色弱者の色の見分けにくさを一般色覚者が体験できるようにした特殊フィルタです。かけて見るだけで、色弱者の見分けにくい配色を探し出すことができます。

メディア UDPJ では、見分けにくい色づかいに気付くことがカラーUD への第一歩、と考えています。「バリエントール」は、商品の開発やデザインの検討、地図、看板、ポスターなど印刷物の配色チェック、教育や行政に携わる方の子どもへの色づかいの違いの確認など、あらゆる場面で利用できるカラーUD 支援ツールだと思います。

今回の視察では、本社工場で眼鏡レンズができるまでの工程を視察しました。眼鏡レンズは、以下のように大きく 6 つの工程を得て完成されていました。

工程 1: レンズ基材の成形

《洗浄》モールドと呼ばれる、ガラスでできた型を超音波洗浄機にかけ、ゴミなどを洗い流し→《テープ巻き》洗浄したモールド 2 枚を正確に位置あわせして、特殊なテープを巻いて固定→《樹脂注入》固定した 2 枚のモールドのすきまにレンズの原料である液体をゆっくりと流し込み→《焼き固め》流し込まれた原料は、その後、オーブンの中で加熱され、型の中で固まり、透明な樹脂に変化→《離型》テープをはがして、モールドをはずして完成。

工程 2: 研磨加工

《前準備》レンズを加工機械に正確に取り付け→《切削》利用者の度数になるように切削→《研磨》表面が鏡の様に艶が出るまで磨かれ、透明なレンズへ。

工程 3: 染色

カラーレンズの場合は、染色加工。

工程 4: ハードコート(傷つき防止コート)

洗浄した後、プラスチックレンズをキズから守るために、

レンズの表面に硬くてキズつきにくいコーティング工程。

コーティング液にレンズ全体を浸透→ゆっくりと引き上げることで、コーティング液がレンズ全面にうすく均一に塗布→レンズ全体をオーブンで加熱するとコーティング液が硬化→プラスチックレンズの表面に薄くて硬い皮膜が形成。

工程 5: コーティング

表面の光の反射をおさえる反射防止コーティング加工や、水滴や油をはじくコーティング加工などを真空蒸着装置※で被膜を塗布することで、レンズの表面は強力に水をはじき、指紋などの油 汚れも簡単に拭き取れるようになる。

※高真空中で蒸着材料を加熱し気化、昇華させ気体分子となったコーティング材料がレンズに衝突、付着することによって、蒸着薄膜が形成される装置。

一般的な眼鏡レンズの被膜は 1 層構造、マルチコーティングで 3 層構造、高価な眼鏡レンズの 7 層構造があるが、「バリエーション」は 33 層構造と複雑な被膜構造で色弱模擬を実現している。

工程 6: 検査

レンズに傷などがついていないか、蛍光灯の明かりを利用して 1 枚 1 枚検査。



眼鏡レンズの本社工場内



「fxg select」蒲郡店

本社工場視察後、同社の敷地内あり、グループ企業である伊藤オプティカルが店舗展開している「fxg select」蒲郡店を視察しました。

「fxg select」は、コンタクトレンズの使用者が多い現代に、バラエティに富んだデザインと多彩なカラーバリエーションにより、眼鏡をかける楽しみを伝えていく新しいコンセプトのショップです。

「fxg select」は、レンズメーカー直営店という利点を最大限に生かし、高品質、低価格の国内産レンズをオシャレなフレームと併せて提供していました。

3 社のカラーUD への取り組みに触れて

今回の視察で、中部地方にある 3 社が取り組んでいる色覚タイプの違いを問わず、より多くの人に利用しやすい製品、情報を提供するという考え方に触れて、改めて「カラーUD」の普及の必要性を感じ取りました。

最後に、ご協力いただいた日立オムロンターミナルソリューションズ(株)様、アロン化成(株)様、伊藤光学工業(株)様の 3 社に改めてお礼を申し上げます。(了)

災害時におけるグローバルなコミュニケーションを提案

活動報告:手話用語 SWG 災害時のボディランゲージに関するワークショップ開催

手話用語サブワーキンググループは 2015 年 10 月 14 日(水)に、ワークショップ「いざ！という時のボディランゲージについて考えてみよう」を、筑波技術大学天久保キャンパス(茨城県つくば市)にて実施しました。

当日は同大学および筑波大学の学生計 9 名(聴覚障害者、留学生、健聴者)及び同 SWG のメンバー5 人が参加し、グローバルに通じるボディランゲージに関して活発な意見交換が行われました。

今号の Newsletter では、ワークショップの様子を同 SWG メンバーの東裕佑氏に報告していただきます。



手話用語 SWG メンバーと熱心に議論する参加者

グローバルに通じるボディランゲージの実現へ

私たち手話用語 SWG は、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、1964 年東京オリンピック・パラリンピックがきっかけで普及に至ったピクトグラムの一歩先を見据え、災害時における身振り手振りを加えた形でのグローバルなコミュニケーションを提案する活動に取り組んでいます。

災害時という場面を設定した背景には、2011 年 3 月 11 日に東北地方を中心に発生した東日本大震災があります。地震発生後、放送が聞こえず、どこに避難すればよいのか、身を守るために必要な情報へのアクセスが困難な方々が多くいました。陸前高田市の「支援を必要とする人の被災時における支援に関する実態調査」によると、避難情報の入手経路には防災行政無線からの割合が 20.6%と最も高く、無線での避難指示が聞こえない方には情報が届かず、逃げ遅れてしまうケースも起こっています。

日常生活では、ある程度時間をかけて筆談や要約、スマートフォンの活用などにより対応することが可能ですが、災害時には身の回りに便利な機器や時間的余裕があるとは限りません。

また、自分自身が被災による怪我などにより情報へのアクセスに制約が生じたり、日本語の通じない状況下での対応を迫られる可能性があります。

そこで今回のワークショップでは、災害時に役立つボディランゲージについて、言葉が通じない、聞こえない等様々な背景をお持ちの学生から広くご意見をいただき、グローバルに通じるボディランゲージの実現に向けた問題点の明確化及び改善のフィードバックを得たいと考えました。

なお、今回ワークショップを開催させていただいた筑波技術大学は、聴覚・視覚障害者のための高等教育機関として、社会に貢献できる先駆的な人材を育成することを目的に、2005 年に設立されました。



意見を記入する参加者

多様な考え方や価値観を出し合って活発に議論



筆談や身振りを交えながらの発表で挙げていただきました。

その後はチームメンバーとの意見交換及び共有、関連するコメントのグルーピング、他メンバーからのコメントを受けての新たな気づきの追加等を行ないました。

参加者同士、自分自身の考えやアイデアをチームメンバーと共有し、積極的に同 SWG メンバーへの質疑応答やチームメンバーとのディスカッションを行う姿勢がうかがえました。

続いてのチーム発表では、チームでまとめた様々なポイントを挙げて、参加者全員が 1 人ずつ交代で説明しました。

聞こえない方に筆談や身振りを交えながら分かりやすく伝えようとしているメンバーの様子がうかがえました。

最後に、筑波技術大学の長島一道先生、IAUD 研究部会長の木暮毅夫氏が講評を行ないました。

長島先生からは、「今回は聞こえない方だけでなく、聴者の学生や筑波大学の留学生にも参加いただき、多様な考え方や価値観を出し合いながら活発に議論が行われ、皆が終始、積極的に取り組んでいたのは非常にすばらしかった。今回のワークショップにとどまることなく、災害は明日起こるかもしれないので早期に対策を講じること、ボディランゲージとしては一発芸ではなく二発芸(逃げろ！＋状況説明)が必要」と講評をいただきました。

木暮氏からは、今回参加いただいたことのお礼の後、「意見がたくさん寄せられたことにとっても感動した。東京オリンピック・パラリンピックだけではなくデフリンピックも含め、本当の UD が必要と感じている。今後は災害が起きた場合にはどんな行動、どのようなコミュニケーションが必要かについて、IAUD のテーマとして手話用語 SWG で取り組み、どうすればよいかについて考え、今回いただいた多くの意見を参考にブラッシュアップを図りたい」との講評がありました



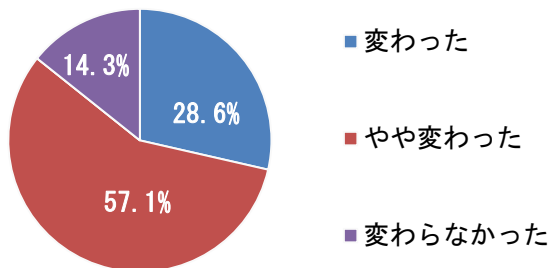
講評する長島先生

グローバルボディランゲージの重要性を再確認

ワークショップ後に実施したアンケートの結果は次ページのとおりです。参加者はグローバルに通じるボディランゲージの重要性を認識されておりました。

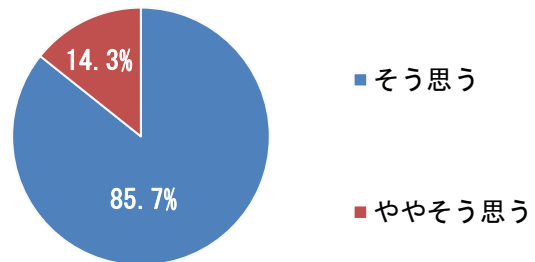
ワークショップ終了後のアンケート結果

Q1:ワークショップ参加前と参加後では意識は変わりましたか？



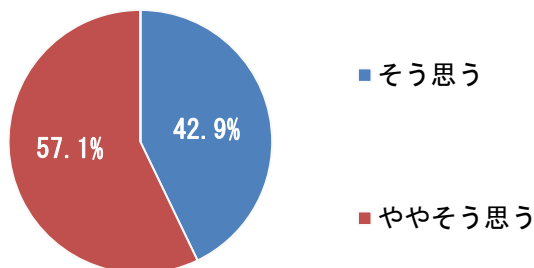
→参加者に意識の変化が芽生えたという相乗効果も生まれた。

Q2:グローバルボディランゲージは重要だと思いますか？



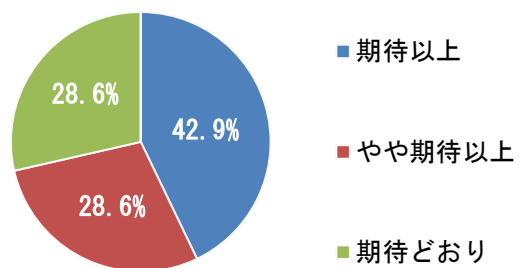
→改めてグローバルボディランゲージの重要性を感じることができた。

Q3:グローバルボディランゲージを今後使ってみたいと思いますか？



→使えるグローバルボディランゲージの支援に意欲を示していた。

Q4:全体を通して、今回のワークショップにご満足いただけましたか？



→参加者の満足度が高く、成功事例を作ることができた。

また、アンケートコメントからも、非常に満足した感想が多く寄せられ、学生間での良い交流の場にもなったようです。主なコメントは下記のとおりです。

・このような取り組みがあることを初めて知り、実際に使ってもらえると助かると思う。もっと意見を出したり、関わっていききたい。

・もっと多くの立場の人にわかりやすいグローバルボディランゲージを考えてみたい、使ってみたい。

・様々な立場の方の意見を聞けてよかった。自分にはない視点から物事を見直すきっかけになった。

・聾(聴覚障害)だけではなく、健聴者、外国人と交流して新たな発見ができて良かった。

一方で、次のようなコメントもありました。

・健聴者も特に学ばなくてもできるジェスチャーが大事だと思う。災害時、障害者を助けようとしても手話が分からないし、伝わらない。

安心でいきいきとした社会の実現へ

今後は子どもから高齢者まで対象年齢の幅を広げ、簡単に覚えられ、いつでも誰にでも使えるような表現を考えていく必要があると感じました。

今後もこのようなワークショップを通じ、様々な方からのフィードバックを受けながら、グローバルボディランゲージ提案活動を継続します。

私たちの活動が2020年の東京オリンピック・パラリンピックを一つのマイルストーンに、障害者、高齢者、外国人がお互いに理解しあい、安心でいきいきとした社会の実現につながるよう、取組んでまいります。

ご協力いただいた筑波技術大学様、筑波大学様に改めてお礼を申し上げます。(了)



参加者全員と記念撮影

手話用語 SWG メンバー募集中！

手話用語 SWG は、一緒に活動くださるメンバーを募集しています。ご関心いただける方は、IAUD 事務局までご連絡ください。

子供たちと一緒に更なる UD 社会を実現するために

活動報告:標準化研究 WG 小学校での UD 体験ワークショップ実施

標準化研究ワーキンググループは、2015 年度の活動計画の一つとして、子供たちへの UD ワークショップ「やってみよう！ユニヴァーサルデザイン（ひとつの発見、そして未来へ）」を 2015 年 10 月 20 日（火）に東京都江東区立第六砂町小学校で開催しました。

当日は同 WG メンバー 7 人が参加し、同小学校 4 年生 37 人を対象に実施しました。

今号の Newsletter では、ワークショップの様子を同 WG の野中博之主査に報告していただきます。



UD 体験ワークショップの様子

体験しながら気づきを得る

2014 年 11 月に開催された「第 5 回国際 UD 会議 2014 in 福島 & 東京」内で、同 WG は大人を対象に、ツールを装着・使用した模擬体験により気づきを抽出するワークショップを実施しました。

2015 年度は同様のワークショップを子供を対象に開催することにし、UD 授業の一環として、自ら体験しながら色々な気づきを得られる 90 分のプログラム（座学＋体験＋発表）で構成しました。

当日は同小学校 4 年生の 1 クラス 37 人を 6、7 人ずつの 6 グループに分け、各グループには同 WG メンバーが 1 人ずつ付いて各コーナーの説明と体験誘導を行い、最後に児童から感想を発表してもらう流れで進めました。



まずは冊子作りから

これまでに様々な形で UD について実践・解説されてきたものや、実際に出前授業等を実施された方々（子供向け UD ワークショップを福岡で実施した協同事業委員会の細山様）からアドバイスを頂き、子供向けの冊子を作ることから始めました。

言葉の表現や絵だけでわかる、伝わる内容とすることに大変苦労しました。

ワークショップ当日には、完成した冊子「UD ってなんだろう？」を参加した児童に配布しました。



冊子「UD ってなんだろう？」

座学、体験、発表の3部構成

①座学～UDってなんだろう？～

まずはUDについて、同WGメンバー深野氏より説明しました。

UDとは「いろいろな人たちが、ともに楽しく快適に暮らせるように、使う人の気持ちになって、ものを作ったり、しくみを考えたり、思いやりをもって行動していくこと」ことであり、そのためには「なぜだろう？」「これでいいのかな？」など観察することが大事だとしました。

また、年齢や身体の状態が様々な人の立場に立って見ると、意外と使いにくいモノや不便なことが見つかることを伝えました。

例えば、人間は情報の80～90%を目で見て得ており、目の見えない人はわかる情報が少ないこと、耳の聞こえない人は聞こえないだけでなく、話すことや伝えることも大変であること、お年寄りは75歳を過ぎたころから体や感覚が変化し、目や耳や筋肉の力が落ちてくること、日本は現在、4人に1人が65歳以上の超高齢社会であるため、お年寄りのことをよく理解することはとても大切であること、などです。



ここでゲストとして、クラス担任の小川先生に高齢者疑似体験ツール「インスタントシニア」を装着して登場して頂くと、児童から大きな歓声があがりました。

②体験～「視覚系」「動作・行動系」6つの体験コーナー～

キーワード「ひとはさまざま」に基づき、各グループが順番に6つのコーナーを体験しました。

1. 車いす

段差を車いすで乗り越えることができるか、又、サポートの立場でどうなのかを体験。見た目には小さい段差でも大変さが実感できたようです。



2. 全盲

アイマスクを装着し、点字ブロック上を白杖を使って歩いてみて、進行方向や止まれが分かるかどうか、また椅子に座るサポートをどうすれば良いかを体験。



3. 全盲(製品での工夫)

聞いてわかる工夫として、「しゃべる炊飯器」「しゃべる TV」では、ボタンを押したり選択することで内容が容易に理解できるかどうか体験。

また、触って分かる工夫として、点字、凸文字、凸記号(エレベーターの操作ボタンなど)が指先だけで分かるかどうか、シャンプーとリンスのボトルの横にあるギザギザの違い、白黒のコマが表面形状の違いでわかるオセロゲームなどを体験。



4. その他の視覚障害、色弱

色々な見え方を、「バリエントール(色弱模擬フィルタ)」「弱視メガネ」「視野狭窄メガネ」「白内障(中・重度)」「飛蚊症メガネ」を使って体験。

絵本、東京路線図、観光案内 Map、教室内展示ポスター、市販されている商品などがどのように見えるか、何か困ることはないかを発見してもらいました。



5. 高齢者

高周波の音が聞こえにくくなる耳栓を装着し、音の聞こえない(友達の声が聞こえない)状況ではどんな気持ちになるのか、また、専用の白内障模擬ツールではなく、簡易にできるようクリアファイルを使い、まわりはどう見えるか、リモコンの文字は読めるかななどを体験。

また、子供用軍手を着け、リモコンや携帯電話などのサンプルで電池交換やボタン操作を行い、中々指が曲がらない、力が入らないことなどを実感してもらいました。



6. 妊婦、外国人

妊婦さんの動きを体験してもらう為に、約 3kgの重りが入ったリュックサックをお腹に抱えて、床マットへの寝転がり、着座、起き上がり、床のものを取るなどを体験。

また、外国のお菓子のパッケージや絵本などを見て、想像と実際の内容が違う場合があることや、逆に言葉が全くなく、絵や数字だけの取り扱い説明書でも十分わかりやすい場合があることなどを、サンプルを見ながら感じてもらいました。



③発表～各グループ代表の児童から～

- ・いろいろな見え方が体験できた。特に、視覚障害の模擬がインパクトが強かった。
- ・点字ブロックを歩くときはみ出してしまって、助けるのが難しかった。
- ・お母さんが毎日こんなに大変なことがわかった。(妊娠中の母をもつ児童より)
- ・シャンプーのギザギザがついているのは知っていたが、初めて理由がわかった。
- ・高齢者体験から、電池交換が難しいことがわかった。

さらに快適に暮らしていくために

最後に同 WG から、身の回りや通学途中、学校内の事など一つでもよいので、どういうところに不便さがあるのかを見つけてクラスで話し合ってみることをお願いしました。

さらに、そういうことを積み重ねることで、地域なども快適に暮らしていけるように必ずなっていくと思うと結びました。

また、今回、ワークショップを進めるにあたり、伊藤光学工業株式会社様からバリエーション 8 個、一般財団法人安全交通試験研究センター様からユニット点字ブロック式を無償で借用ご提供、また、NEC 様からサポートを頂き、誠に有難うございました。

江東区まちづくり推進課様には学校との連携を頂き、大変助かりました。

同 WG メンバー各社からのツール提供も有難うございました。

最後に本ワークショップに多大なご協力を頂きました、東京都江東区立第六砂町小学校の山中校長先生、小川先生、職員の方々へ深くお礼申し上げます。(了)



◆標準化研究ワーキングメンバー◆

木暮(富士ゼロックス)、久保先生(京都工芸繊維大学)、蔦谷(富士通)、田中(CUDO)、大内(NEC)、西村(セイコーエプソン)、深野(三菱電機)、中山(東芝)、松下(日産)、野中(トヨタ)





2016 年 1 月の予定

1 月 14 日現在

月	火	水	木	金	土	日
				1 元旦	2	3
4 冬季休業	5 冬季休業	6	7	8	9	10
11 成人の日	12	13	14 15:00～ 情報交流センター @IAUD サロン	15 15:00～ ワークスタイル PJ @IAUD サロン	16	17
18 15:00～ 運営委員会 @IAUD サロン	19 14:00～ 移動空間 PJ @三菱電機	20 13:30～ 余暇の UDPJ @IAUD サロン	21	22 13:00～ 手話用語 SWG @IAUD サロン	23	24
25	26	27	28	29 13:00～ 標準化研究 WG @IAUD サロン	30	31

次号は 2 月上旬発行予定

特集:アワード受賞内容紹介②、住空間:シェア金沢見学会及びワークショップの開催報告、アリゾナ州立大学とワークショップ開催報告、研究部会共同ワークショップ開催報告(予定)

無断転載禁止

IAUD 情報交流センター (IAUD サロン) :

〒104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9 トヨタ八丁堀ビル 4 階
電話 : 03-5541-5846 FAX : 03-5541-5847 e-mail : salon@iaud.net